



TITLE:

京都外科集談会抄録

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会抄録. 日本外科宝函 1956, 25(5): 594-598

ISSUE DATE:

1956-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206285>

RIGHT:

京都外科集談会抄録

昭和31年3月例会

(1) 術後性テタニーに対する臓器移植の影響

京大外科2 今井昭和

吾々は甲状腺腫切除後に発生し、種々の対症療法に抵抗したテタニーに対し、異種の副甲状腺移植をくりかえし効果を認めた興味ある1例を経験した。一般に多くの術後性テタニーは早晚症状の軽快するを常とするも、移植上皮小体の運命は別として、従来複雑に考えられた種々の治療法に比し、本法はカルシウム注射を遠ざけ得る一つの治療法としても一応推奨し得るものと思われる。

追加 木村忠司 Epithelpörperchen は下甲状腺動脈を切断する時に起り易い。それで Junghanns は下甲状腺動脈は単に遠くで結紮するだけになっている。又歐洲の Struma には胸廓間に嵌入するものが多く Sternum を割つてこれを切除していた。又大きなものでは支持糸を腫瘍実質にかけて引き出し乍ら手術を進めていた。

(2) 長期観察を行える Lymphosarkom の1例

京大外科1 松島正之

(3) 有癭性横隔膜下膿瘍に対する筋肉瓣充填術

市立長浜病院外科 今村伸二、中瀬 明

切開排膿後2ヵ月余も癭を残して治癒しない横隔膜下膿瘍に対して有癭性筋肉弁を充填、閉鎖する事によつて全治せしめ得た症例を経験した。本手術方式に於ては膿管切除膿瘍腔の完全なる搔爬清掃が最も大切で、その上に出来るだけ死腔が残らないように筋肉弁を充填、肝臓表面と縫着するのがコツである。術後浸出液多量の時は穿刺を繰返さねばならない。

元来胸壁有癭性筋肉弁を種々なる胸部疾患に応用されたのは青柳教授であつて、私の方法もその一つの応用に過ぎない。

(4) Wilms 氏腫瘍の1例

京大外科2 藤田竜五郎

3才男子 昨年夏軽度の腹痛を来した際、医師に偶然右季肋下部に鶏卵大の腫瘤あるを指摘されたことがあつたが血尿、疼痛等自覚症状何等来さぬため、7ヵ月間放置するも本年2月、腹部が著明に膨隆したため来院する。腹部は全般に膨隆し、殊に右腹部部に著しく、且つ皮下静脈の拡張を認め腹部右半分の殆んどを占める移動性無き成人頭大の腫瘤を触知した。血液像は中等度の貧血を示し、尿には異常所見なく、肝機能は稍障害し腹部レ線透視では結腸が腫瘤のため反対側へ圧排されて居り静脈性腎盂造影術では右腎盂、腎盂、輸尿管像は欠如し、右腎臓腫瘍の診断で入院7日目、経腹膜的に本腫瘍剝出術を行う。肝床の部と稍高度に

癒着せる腎臓腫瘍にして完全に右腎を剝出し得るも、肝右葉には既に転移巣を認めた。肉眼標本では腎の殆どが腫瘍組織で充され、腎実質の殆どが被膜様に菲薄となり、組織標本では Wilms 氏腫瘍の構造を認めた。術中出血量を稍々上廻る輸血と酸素吸入により術後の一般状態は良好なるも術後2週間目より両側股関節以下の運動麻痺、第2腰椎支配領域以下の両側下肢知覚麻痺並に膀胱直腸障害等の脊髓麻痺症状現れ、レ線像でも第5腰椎に脊椎転移と思われる所見を認めた。深部照射を以後毎日行うも脊髓麻痺症状軽快せず、未治の鬱転医す。

尚併せて本症に対する文献的考按を述べた。

(5) 盲腸部肉芽腫の1例

京大外科 I 斎藤 晃

23才男子の盲腸に発生せる肉芽腫の一例を報告し、既往の虫垂炎との関係 Grohn 氏病との類似点、Eosinophilic Granuloma との関係等に就て些か考按を加えた。

追加

木村忠司：1. 虫垂は簡単にとれたのでしょうか？

答 簡単にとれました。

2. その肉芽腫は後腹膜より出たものですか？

答 その様に思われます。

(6) 胃筋腫の2例

神戸市民病院外科

渡辺三喜男、千原卓也、小亀清孝

1) 長期間高血圧症治療中の59才の女が、たまたま大量の下血を3回も来し、レ線検査の結果興味あるレ線像を得、胃内腔へ膨隆した悪性腫瘍を疑い開腹、胃体部後壁より内腔へ発育せる $5.5 \times 4.5 \times 3.5$ cm, 225g の腫瘍を含め胃全剝施行、鏡検の結果典型的な胃粘膜下内筋腫であつた1例を報告した。

2) 48才の男、胃潰瘍により胃切除施行、術中残胃後壁に胃外発育型の拇指頭大のポリープ様腫瘍を偶然発見し剝除、結局胃粘膜下外線維筋腫であつた1例を報告した。

追加 渡辺三喜男：第1例に於て術前に胃良性腫瘍か悪性腫瘍かの確診を得ることが困難であつた。これに関して術中のガストロスコプを行うことが望ましい。胃潰瘍の癌化の場合、胃粘膜癌の場合にも同様のことが云える。病変部から離れた場所でも胃切開を行い胃内面を肉眼で直視し、更に試験切片を切除して手術方針を決定すべきである。

(7) 十二指腸空腸曲部附近の2狭窄例

京大外科 I 草刈一友、石藤守正

私達が経験した慢性十二指腸狭窄症及び腸内に弁を有した先天性空腸狭窄症の各1例について臨床報告する。

例1. 56才の男子。上腹部の膨満感を主訴として入院。此の症状は約10年前より食後に必ず来り、2年前より夜間に嘔吐を来す様になった。入院時所見は腹部全般に鼓音著明。レ線にて胃及び十二指腸の著明な拡張を認めた。開腹の結果十二指腸下部に腸間膜との癒着性癒着を認めた例である。

例2. 10ヵ月の男子。腹部膨満、嘔吐を主訴として入院。生後間もなくより腹部膨満を認め、日に日に著明となり嘔吐を来す様になった。入院時には、レ線にて胃の拡張を認めた。開腹の結果空腸起始部にポケット型の弁膜を認め腸管の通過障害は之による狭窄の為に空間は極く僅か上方に認めるのみであった。

上記2例とも手術により全快。例1は狭窄が慢性に経過した十二指腸の圧迫によるものであり、後者はポケット型の弁による空腸狭窄であり、何れも稀なものと考えられる。

(8) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける骨折の統計的観察 (其の1 一般的統計)

玉造整形外科

塩津徳政、大塚哲也、中脇正美
林 瑞庭、山田 栄、香川 徹
中村博光、山県時房、都谷 進
山本忠治

昭和24年1月より30年9月に至る最近約7ヵ年間に本院に於て取扱つた骨折患者総数3076例に就いて一般的統計を行い次の結果を得た。府県別では島根県が94.42%で圧倒的に多く、季節、月別では秋季及び10月が夫々27.5%、10.6%を占め最高である。部位別では下腿が19.12%で最も多く、性別は男性が76%を占めている。左右別は左が55.73%である。保険別では国保が44.6%で最も多い。年齢別では10才未満が23.5%で最も多く、一般に年齢の増加に反比例して減少する。原因別では墜落に依るものが28.48%で最も多く、一般に転倒、打撲と共に重要な原因となつている。開放性骨折は3.4%である。来院迄の初療者は医師関係22.2%、整骨師13.8%で、入院は19.3%となつている。来院迄の期間は即日入院が15.9%、1ヵ月以内が77.67%である。ギプス固定は35.4%、手術は23.7%である。外傷部位と骨折部位の間には密接な関連性がある。外傷中骨折は55.9%を占める。脱臼は上肢に、捻挫は下肢に多い。

(9) 経静脈性脂肪輸入時の組織顕微化学的研究 (特に注入脂質の種類による差異に就いて)

京大外科2 伊 豆 蔵 健

我々は種々の脂肪を原料として作製した各種の脂肪乳剤を試験の静脈内へ注入し、注入脂肪体の差異に基

く体内代謝過程の相違を組織顕微化学的に比較検討し、次の如き所見を得た。

(1) 注入脂肪球は先ず肺胞喰細胞、肝星細胞、脾臓の網内系細胞群に摂取され、これ等細胞内で漸次中性脂肪から Phospholipid に変化する。

(2) 低級脂肪酸を比較的多量に含有する肝油乳剤注入の際は、肝臓実質細胞内に多量の Phospholipid を立証し得るが、之に反して高級脂肪酸のみを含有する胡麻油乳剤、Triolein 乳剤の際は、肝臓実質細胞内に立証し得る Phospholipid 量は軽微に過ぎない。

(3) 高級脂肪酸の Triglyceride から生じた Phospholipid は肝臓実質細胞のみでなく全身の肝外組織にも直接に移行、処理されるものと考えられる。

(4) 以上の如き関係は脂肪の経口的摂取時に於ても認められた。

(5) 肝油乳剤を反覆注入する時は漸次肝臓実質細胞内に Phospholipid の蓄積を来し、遂には脂肪肝の発生を見るに至るが、胡麻油乳剤では斯る危惧は認め得なかつた。

(10) 総輸胆管空腸吻合後の胆嚢の態度に就て

京大外科1 吉 田 俊 明

総輸胆管腸吻合後の上行性感染の問題に就ては種々論議されているが、私は主として胆嚢の態度に関して実験を行つた。

実験動物として犬を用い、ルー氏Y字状吻合方法で総輸胆管空腸吻合を行い、一定時日後に胆嚢の各機能を検査すると共に肝臓胆嚢胆管の組織学的検索を行つた。

その結果は、胆嚢の各機能は減弱し、胆嚢内は感染性胆汁で満たされ、胆嚢壁に炎症性変化を認めた。斯る変化は肝臓胆管にも認められた。

それで総輸胆管空腸吻合後はルー氏Y字状吻合を行つても上行性感染は必発であり、胆嚢の機能減弱も主因に感染によるものと考えられるが、他方オダイ氏括約筋と協動し得ぬ為にその機能の減退を来し得る可能性も考慮せねばならぬ。

何れにしても総輸胆管空腸吻合に際しては胆道の感染源たり得る胆嚢の同時切除を合理的であると考ええる。

(11) 副腎皮質及び卵巣の組織学的変化と乳腺腫瘍について

京大外科2 宅間 皓 増田強三

乳癌の場合の副腎皮質及び卵巣の組織学的変化については、第3回日本内分泌学会、西日本地方会に於て報告したが、今回は Mostopathie について得た成績及び Mastopathie と乳癌の場合の差について述べた。

Mastopathie が乳腺に発生する根底には、卵巣、副腎皮質の失調があり、性腺に起源をもつた Hormone のアンバランスがあることを組織学的な方面から立証した。即ち副腎皮質に於ける結節状増生、卵巣に於け

る卵胞嚢胞、黄体嚢胞の所見は、Fekete, Woolley, Little (1941); Furth, Sobel (1947); Flux (1954) Lipschutz (1946) も云つていように性腺に起源をもつた Hormone のアンバランスが存在することを示しており、而も卵巣の所見から考えても Estrogen 過剰の場合のみでないことは明らかであり Androgen 低下という要素が多分に推定される結果であろうと考えた。副腎皮質網状層の褐色変性は性 Hormone のアンバランスの一つの示標となることを提証した。乳癌と Mastopathie との差は、乳癌に於ては副腎皮質の結節状増生、肥大、褐色変性の点では差が認められないが、リポイド減少がつよく、また卵巣に於ても、黄体形成障害、卵胞发育障害が特に目立って、つよいのであり、Mastopathie の場合には特に黄体形成が良好であった。又人為的に両性 Hormone のアンバランスを作成しても、その変化が自然発生の乳癌及び Mastopathie の際の変化に遙かに及ばないことから、乳癌或は Mastopathie というものが単なる両性 Hormone のアンバランスだけによる刺激の結果として発生するものではなくて、更に別の要素も加つて初めて発生するものと考えられた。

(12) 下垂体の組織肥胖細胞

京大外 I 長谷川正義, 本庄一夫

第3回日本内分泌学会西部地方会で既に述べた通り吉岡・草間両氏の所謂臍細胞は、犬の下垂体に出現する組織肥胖細胞にすぎない。犬では Mastocytoma (Bloom) の報告もあり、肥胖細胞の出現率も高く、下垂体に多く見出されても不思議ではない。牛の下垂体でも、犬同様多数の肥胖細胞が見られる。Gomori の aldehyde-fuchsin 法でも濃青色に容易に染色されるが、人、豚の肥胖細胞顆粒も牛の場合と同様、aldehyde-fuchsin に親和性を有するものと思われる。人の下垂体では漏斗部に比較的多く認められる。後葉では Thionin で緑色に染る顆粒を持つた所謂 pigmenthaltige Pituicyten が見られるが、これと肥胖細胞とは容易に区別される。家兎、鼠、豚、鶏の下垂体にも肥胖細胞は少数乍ら出現する。鶏の場合は脳内血管周囲にも存在する。一般に肥胖細胞は結締組織増殖強度な慢性増殖性炎の際、該臓器のみならず、他の組織にも多数出現すると云われているが、我々は種々の臍臓手術後の犬で、著明な肥胖細胞の増生が、下垂体に

も起る事を認めた。下垂体の肥胖細胞の、この様な動態と、漏斗部から後葉にかけての分布状態を併せ考えるに、この細胞の存在が下垂体機能に何らかの影響を与えているのでなかろうかと、推測される点がある。

追加 本庄 吉岡氏等東大一派の人には臍全剝後、下垂体に臍細胞と称する特殊細胞の出現することを発表しわれわれの注目を引いた、果してしかるか、臍細胞は特異的なものであるか否かを検討するためにこの研究に着手しその結果はたゞ今演者の発表した通りである。

追加 木村忠司 Hypophyse の後葉から漏斗にその mastzellen が汎出現れると言うのは Gomori 顆粒又は変化せる Pituicyten と関係がないだろうか、又 Paucereas を切除すると、後葉、Nucl. supraopticus 等に変性して picrotisch となつた神経細胞が現れる (Hagen) と言われるが此の様な所見とも全く別なものか。

(13) 先天性股脱に於ける前捻角の問題

京大整形 森田信, 小野村敏信, 朝田健

(14) 推間軟骨ヘルニアに対する骨形成的部分的推弓切除術の遠隔成績

京大整形 桐田良人 大石宏, 土屋良之

追加 近藤鋭矢 1) 後治症状は「コウイシヨウジヨウ」と言う方がよい。

2) 中部日本整形外科学会は中部日本整形外科災害外科学会と訂正すること。

3) ヘルニア摘出パンチは髓核鉗子と改める方がよい。

追加 渡辺三喜男 後腹膜血管の刺創による出血の救命例の一例を追加する。腹腔にも多量の出血があつたが後腹膜からの出血が手術時止つていたのでそのままで閉腹して救命した。後腹膜血管損傷でも損傷の程度がひどければ大動脈に止血鉗子をかけてから凝血を除去すると言う考え方をすべきではないか。

追加 木村忠司 Retroperitoneum の Hämatom を operativ に破らなかつたらもつと生き延びることが出来たのではないか。Coagula と Peritoneum との間の圧力は相当強いので或はその方がよかつたかも知れぬ。

昭和31年6月例会

(1) 第2ケーラー氏病の1例

京大整形 赤星義彦, 福田敏雄

症例: 24才, 女子, 事務員。誘因と思われるものなく約5年前より右足背に腫脹, 疼痛を来した。

レ線像では第2中足骨小頭に骨堤隆起を見、関節裂

隙は拡大し、腔内に多数の球状陰影を認めた。

手術法としては、骨堤隆起及び変性せる関節軟骨のみを切除し、中足骨小頭の切除は行なかつたが、疼痛は完全に消失し機能的にも良好な成績をあげることが出来た。尚術後1年における骨頭部修復も良好であつた。本症例における関節内遊離体は11個の多きを算

し、内2個は茎をもつて関節囊と連絡していたが、かなりの多数の遊離体を認めたものは稀であり、組織学的検索の結果からも離断性骨軟骨炎に近いものであった。

(2) 非特異性炎症による腸狭窄2例

京大外科 1 宮 脇 英 夫

何れも慢性腸狭窄症状を来したものである。第1例は48才男子。レ線的に廻腸上部に狭窄部あり、開腹の結果廻腸末端部より口側80cmに限局性の輪状癒痕性狭窄と腸間膜リンパ腺腫大を認めた。第2例は32才女子。レ線的に空腸に狭窄部を認め、開腹せるにTreitz氏靱帯より240cmの空腸下部に4ヵ所の輪状狭窄部を認め腸間膜リンパ腺腫大があつた。

組織学的には何れも非特異性肉芽炎でKrohnの所謂限局性小腸炎と考えられる。何れも腸切除を行った。

(3) 後眼窩腫瘍の1例

京大外科 1 大 谷 博

14才男子で左眼球突出を主訴として入院、X線撮影で後眼窩蓋に鶏卵大の腫瘍による濃い陰影を認めた。手術は前頭部開頭で腫瘍を摘出し良好な結果を得た。摘出標本は35g、細かい砂をこねた様な感じで全部一様の性状であつた。組織標本では200~300μ以下の不規則な塊状の石灰沈着が密に見られ、メニギオームの間質に高度の石灰沈着を来したプサモームであると考えられた。

このメニギオームがどこから発生したかは興味ある問題で、眼窩内では視神経鞘の蜘蛛膜細胞よりメニギオームが報告されているが、本例は発生部位から視神経鞘とは無関係である。それで嗅神経絲に添って存在する蜘蛛膜から出た、即ち嗅絲が篩骨板内を通り抜ける中間の場所から発生したメニギオームと考えられる興味ある1例である。

(4) 肺腫瘍として発見された胸腺腫の1例

京大外科 2 巽 亘

我々は最近60才男子の患者で、自覚症状全くなく、現症、特に局所々見にも特記すべき所見を認めず、胸部レ線像、気管支造影像により肺内腫瘍と診断して手術を行い、右上葉S³に囊腫状となつた腫瘍の存在を確認し右上葉切除を施行し、病理組織学的に胸腺腫であつた所の稀しい症例を経験した。

本症例に於ては本来の位置の胸腺より発生した縦隔洞腫瘍として肺実質まで病変が波及したと考えられる症状、所見は全くなく、主として肺腫瘍の姿をとり発現した事は興味があり、本症例に対する考察と共に報告した。

(5) 腹腔内混合腫瘍の切除例

大阪医大外科 2 入 江 義 明

肝鎌状靱帯部から発生した稀有なる混合腔瘍Teratoblastomの切除例を報告した。

35才女子。2ヵ月前右季肋部に軽度には痛性腫瘍を触れ、これが急速に増大して小児頭大となつたので入院時、体格栄養中等、右季肋部から窩部にかけて小児頭大の腫瘍を認め、表面平滑、弾力性硬、移動性を証明した。レ線透視で胃体部が腫瘍により前方から圧迫され、又腫瘍の上端近く石灰沈着像を認めた。手術によりこの腫瘍は肝鎌状靱帯部から発生して下方へ増大し胃横行結腸靱帯内に入りこみ、横行結腸間膜の前方にひろがつたもので、その茎部に石灰沈着部を有することが判明した。腫瘍に接する左右の肝葉を楔状に切除し、且胃横行結腸靱帯の一部をも切除して腫瘍を完全に切除し得た。腫瘍は20×20×12cm、2kg、弾力性硬、茎部の石灰沈着部では石灰は表層にのみ存在し中腫瘍組織を容れていた。組織学的に三胚葉組織を有するTeratoblastomであつた。

(6) 腸重積症の原因となつた廻盲瓣原発性リンパ肉腫の1例

京大外科 2 戸 部 隆 吉

27才男子、術前十二指腸周囲炎と診断された総腸間膜症を有する廻盲腸重積症の例で、偶然に転移形成以前に切除し得た廻盲弁原発性淋巴肉腫の一例を経験したので報告し、併せて若干の考察をなした。

(7) 巨大胆石幽門嵌頓の1治療例

神戸中央市民病院外科 小亀清孝、竹村広彦

1) 60才の女性、胆石症により入院中ひき起した胆石(コレステリン。ビリルビン石灰、34.5g)幽門嵌頓を術前診断し、併も胃洗滌により胃内腔に脱落せしめ簡単な胃切開により剔出治癒せしめた1例を報告した。

2) 胆石排出路は手術所見より胆嚢胆道系と消化管との内瘻は考えられず、正常路と思われるが確証はない。

3) 患者は術後5年の現在、健常にして何等の自覚症もない。

4) 胆石幽門嵌頓は稀なものであり、本邦に於ける第3例と考える。

(8) 急性局所性回腸炎の1例

神戸中央市民病院外科 小亀 清孝

59才の女子に現れたIleitis localisata acutaの1治療例について報告した。保存的に化学療法併用により全治したため組織学的追求を行い得なかつたが、本症の原因が感染でないとするれば、従来行われて来た化学療法も再検討の必要があると思われる。私は本症は一種のkollagendiscaseではなからうかと考えている。

(9) 虫垂粘液囊腫による回盲部腸腫重積症例

大和高田市民病院外科 杉本雄三 藤野昭三

56才の男、比較的慢性に腸狭窄症状を訴え、開腹の

結果は回盲部の腸重積症で、嵌入腸管を解離すると、虫垂根部に胡桃大の腫瘍があり、これが起点となつて生じたものと考えうる。回盲部切除を行った。

剔出標本をみると、虫垂下癰痕性に短縮、その根部は盲腸腔に突出して胡桃大に膨隆しており、これを切開すると内容は黄色半透明鰾卵状の多数の粒子で満された囊腫で、囊腫の内腔は白色平滑、盲腸腔との交通は全く認められず、鏡検するに所々虫垂粘膜の脱落とその部の再生が見られ、囊腫壁は粘膜下層で形成されており、内容は粘液性である。

虫垂 Myxoglobulose による回盲部腸重積症の稀有な1例なりと考え、粘液球形成に関して若干の文献的考察と共に報告した。

(10) 血族結婚によつて兄弟に現われた同一型式指趾奇形の症例

国立山中病院整形 野島元雄、円井一示

2ツの家同志の間に2代に亘つて重ねられた従兄妹結婚の結果、8才と6才の兄弟に指趾奇形を見た。調査し得た一族に先天性奇形を認めず、又、母は流産なく、且、妊娠中異常を訴えず、共に正常産で、指趾以外に異常はない。右手は、兄はⅢ、Ⅳ指間に基節部迄、弟はⅡ～Ⅳ指間に末節部迄結合織性駢指を示し、共にⅤ指は斜指、更に兄にはⅡ、Ⅲ指間、兄弟共Ⅳ、Ⅴ指間に皮膚性駢指があり、兄のⅢ指は外反指、Ⅳ指は肉反指を呈す。左手は、兄弟共Ⅳ指は欠指状であり、レ線像に於てⅢ、Ⅳ指間の骨性駢指を示す。又、この駢指指とⅤ指の間に皮膚性駢指があり、足では兄弟共Ⅱ、Ⅲ指間に結合織指を見る。即ち發育抑制奇形のみ示して、過乗形は欠如している。斯く兄弟に同一型式に且、両側手足の指に奇形を來たし、互に異なる他の奇

形を合併しない症例の報告は甚だ稀有であるが、本症例の發生部位は、發生學上及統計上の示す部位と略々一致する。本症例の成因に就ては、血族結婚が最も大なる因子であろうと想像する。

質問 近藤茂 報告された家族歴中に遺伝を考えられる様な畸形は証しなかつたか？

質問 鶴海寛正：左手の駢指に対してはどの様な手術をおやりになりましたか。

近藤氏に対する答 調査可能の範囲が限定されて居りますが、他の一族には先天性奇形を認めて居ない。

鶴海氏に対する答 結合織性駢指の部を開いたのみで、骨性駢指の部には何等手を加えて居りません。

(11) 先天性脛骨欠損症の1例

国立山中病院整形外科

野島元雄、福田敏雄

我々は先天性股脱、膝蓋骨及び多指症を合併した先天性脛骨欠損症の1例を経験した。症例：1ヵ月半、女。生來右下腿及び足部の變形ありと訴えて来院。家族歴中には畸形発症、血族結婚を見ない。

右下腿は著明に短縮し強い内反足位をとり7個の足指を有す。又触診上膝蓋骨は認めない。線上右脛骨は著しく短縮し塊状陰影として認めるのみで、腓骨も左側に比べて短小である。股関節には脱臼を認める。

本症に対する治療法は症例によつて種々考慮されるべきであるが、我々は患脚の支持性獲得を第1要件とし、内反足矯正、足関節固定、腓骨移動による新膝関節形成を理想的方法と考え生後6ヵ月～1年を手術適期とした。尚この際残存脛骨の腓骨中央部への移動移植によつて腓骨延長を企てている。